

歩む伊中

「伊中のペン」を胸に



凌雲碑

岐阜市立伊奈波中学校

歩む伊中

「伊中のペン」を胸に

岐阜市立伊奈波中学校



伊奈波中学校の校旗



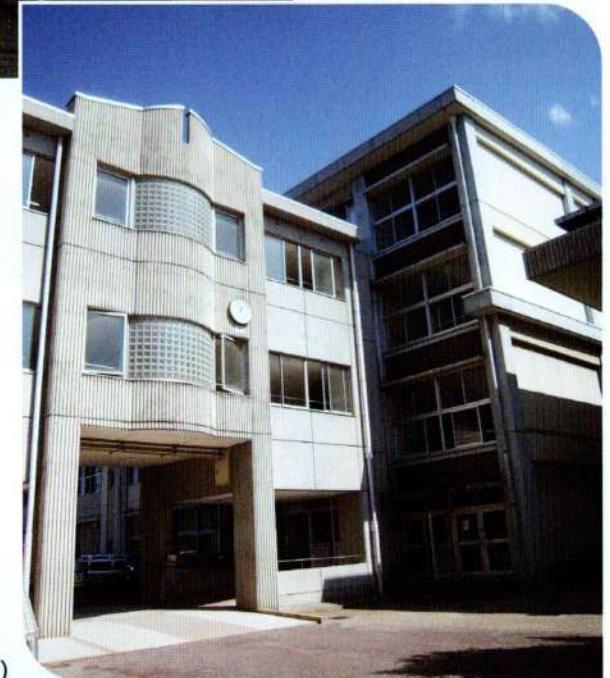
南舍・重層渡・北舍
(東から)



校門と南舍（道路東から）



南舍と「凌雲の碑」のある
東庭園（東道路から）



校章とデザイン化した
重層渡り（西中庭から）

はじめに

伊奈波中学校が創立されて六十数年。この間に、この学び舎から卒業つていった生徒は二万六千人余に達します。学校が創立されて以来、それぞれの時代の伊奈波中学校は先生方や地域の方々に導かれ支えられながら、さまざまな問題に真正面から取り組み、学校の歴史と伝統を築いてきました。その伝統や歴史は、この学び舎に学んだ多くの生徒によって受け継がれ、今日の伊奈波中学校を形作っているのです。

現在、みなさんはこの学校をどのように感じていますか。自分の力を鍛え伸ばせる学校だと受けとめている人もいるでしょう。父や母、祖父や祖母の学んだ学校でとても身近に感ずるという人もいるでしょう。校舎が古いとか不便だと感ずる人もいるでしょう。みなさんの受けとめ方や感じ方はいろいろあると思いますが、伊奈波中学校はこれまで多くの人々がたゆまぬ努力を続け、多くの問題を抱えながらも、一歩一歩と歩み、現在にいたっているのです。

この本では、創立の経緯とその精神、それ以降の伊奈波中学校で創造され今日も受け継がれていることに焦点をあてながら、整理をしました。正確に学校の歩みを整理したとはいえませんが、現在の伊奈波中学校を理解するのに役立つものと思います。これまでの伊奈波中の歩みを知ることは、明日の伊奈波中を考える手がかりになるはずです。

50周年記念の北原洋輔



目 次

はじめに

○ 伊奈波中学校のあゆみ

第一期 激動の創立期

【一九四七（昭和二三）年度～一九五五（昭和三〇）年度】

- 一、伊奈波中学校の創立
 - (一) 伊奈波中学校の開校
 - (二) 校地決定と校舎建築
 - (三) 校名の制定
 - (四) 全生徒がようやく一箇所で
- 二、伊奈波中学校の精神
 - (一) 「伊奈波中校章」の象徴するもの
 - (二) 校友歌にこめられたもの
 - (三) 激増する生徒数
- * 生徒の制服を定める

第二期 学校建設期

【一九五六（昭和三一）年度～一九六七（昭和四二）年度】

17 16 14 12 10 9 8 6

18

- 一、凌雲の志と校歌
 - (一) 「凌雲」の由来から
 - (二) 校歌の制定
- 二、生徒数の増加と学校施設
 - (一) 旧体育館の建設と校舎の増築
 - (二) 給食室の竣工と校舎火災
 - (三) プールの完成
- 三、金華橋の建設
 - (一) 金華橋の開通
 - (二) 通学距離が半分に

第三期 充実期

【一九六八（昭和四三）年度～一九七八（昭和五三）年度】

30

31 30 27 27 26 25 23 20 18

- 一、学校施設・教育内容の両面で教育の充実
 - (一) 現体育館の建設
 - (二) 三十年受け継がれている学校の教育目標

1

(三) 特殊学級の併設

第Ⅳ期 変動期
【一九七九（昭和五四）年度～一九九七（平成九）年度】

- 一 校舎改築
 - (二) 木造校舎から鉄筋の校舎へ
 - (二) 格技棟の建設
 - (三) 重層渡りの建設
- 二 全国的な中学校荒廃の中で
 - (二) 児童生徒を育てる会の結成
 - (二) 全国大会に出場 準優勝
 - (三) 凌雲のつどい
 - (四) 生徒会による「JOS活動」
 - (五) 同和学習の取り組み

*岐阜大学附属病院内に病弱学級を開設

*イタリア フィレンツェ市グラムシ中学と交流

第V期 教育内容の改革期

43

32

33

【一九九八（平成一〇）年度～現在】

- 一 教育改革の波
 - (二) 教育改革
 - (二) 情報学習への取り組み
- 二 地区生徒会の取り組み
 - (二) 地区生徒会の発足
 - (二) 中学生は大切な地域の担い手

45 44 43 43

42 42 41 40 38 37 36 35 34 33

おわりに

○ 資料（一）伊奈波中学校歴代校長の座談会

○ 資料（二）伊奈波中学校の沿革史

○ 資料（三）伊奈波中学校史 概略年表

88

67

49

47

○ 伊奈波中学校のあゆみ

第一期 激動の創立期

【一九四七（昭和二二）年度～一九五五（昭和三〇）年度】

一、伊奈波中学校の創立

（一）伊奈波中学校の開校

私たちの学校は、一九四七（昭和二二）年五月三日に、岐阜市立第一中学校として開校されました。それまで、日本には現在のような義務教育としての中学校はありませんでした。当時の義務教育は、国民学校六年間だけでした。国民学校を卒業すると、働くか、国民学校高等科（二年間）に進級するか、さらに別の上級学校へ進学するかの道をそれぞれ選んでいました。

戦後になって、二度と戦争の慘禍をくりかえさないための新たな国づくりに向け、新しい教育制度がつくられました。国民学校は新しく小学校となり、さらに新たに男女共学の中学校を創立し、小学校六年間に中学校三年間を加えた九年間を義務教育としたのです。現在のように、小学校と中学校で九年間の義務教育を終え、自分の進路を選ぶようになつたのは、この時からです。

こうした制度改革のもとに、旧岐阜市内では新しく八つの中学校がつくられました。それぞれ第一中学校から第八中学校まで、とりあえず番号で学校名を表示しました。その中の第一中学校が、金華・京

町地区の十二歳から十五歳の青少年を対象として創立されたのです。

中学校を創立する当時の岐阜市は、戦争の傷跡もさめやらぬ混乱した状態にありました。太平洋戦争末期の一九四五（昭和二十）年七月、空襲で多くの方が亡くなり、多くの建物が焼失したり被災したりしました。物資は不足し、物価は日に日に高くなり、食糧も思うように手に入らない状態でした。被災した人々は、焼け残った家具や衣類を売つては食料を手に入れるという生活をよぎなくされ、毎日の生活をやつと過ごすような状況でした。市内にあつた国民学校の多くも空襲で焼失したり被害を受けたりしていました。教育を再建するには、まず、こうした学校を建設したり改修したりしなくてはなりませんでした。その上に、新たに中学校を建設するというのですから、とても資金がありません。小学校は、当時の国民学校の建物や備品を使って何とかスタートするめどがたつたものの、新制の中学校は、新しい制度のため、一から始めなくてはなりません。学校用地も校舎もなく、指導する先生もいない状況でした。新たに中学校を作ることはたいへんなことだったのです。

しかし、子ども達の教育こそ日本を再建し、これから新しい日本を作るのに必要なことだと多くの人々は考えました。次代を担う子ども達のためにと寄付を募り、中学校建設の資金を集め、中学校創立に向けた努力がされました。

私たちの伊奈波中学校も、もちろん開校当初には校地も校舎もありませんでした。そこで、まず金華小学校の講堂や校舎の一部を借りて中学校を開校したのです。その日は、憲法の発布された一九四七

(昭和二二) 年五月三日でした。しかし、中学校を開校しても、黒板もチョークもない状況でした。開校と同時に「第一中学校 P.T.A.」が組織され、先生も保護者もいつしょになつて子ども達のしあわせを考えていこうということで、学校のための資金集めや支援の努力がされました。そうした支えのもとで、授業がスタートし、続けられたのです。

(二) 校地決定と校舎建築

第一中学校は、金華小学校の講堂を借りて教室としましたが、教室と教室の境は板一枚で仕切つたものであり、隣で授業される先生の声も生徒の声もまる聞こえで、落ち着いて学習できるような状況ではありませんでした。そのうえ、学校に必要なぞうきんやバケツといったものまでもなく、小学校のものを借りるという状況でした。学校が創立されて、一年後には明徳地区も第一中学校区に編入されました。が、五ヶ月後にはさらに学校区が変更され、明徳地区は第二中学校区（現在の明郷中学校区）に変更され、新しく長良川以北の島（早田地区）や則武の一部（新田地区）が加わり、金華小学校のみならず則武小学校の南校舎や女子商業学校（現在の県立岐阜商業高等学校のもとになつた学校）の校舎にも間借りして、中学校の授業が行われました。

中学校の校地についてもいろいろ検討され、長良川以北の県有地であつた現在の地（岐阜市則武一八一六番地）に定められました。校地といつても、かつての古川（古い時代の長良川）の河原です。見渡

す限りの麦畑と松林の中に、新築するための物資も予算もなかつたので、長森地内にあつた軍隊の兵舎（岐阜県にあつた六八連隊の一施設）の一部を払い下げてもらい、この地に移築し校舎としたのです。生徒全員の手で、長森にあつた旧兵舎（現在の岐阜東高等学校の場所）の机と椅子を担ぎ徒步で運びました。一九四九（昭和二四）年一月、やつと二階建八教室分が完成し、岐阜女子商業学校で学んでいた一年と三年の六クラスが移転しました。ようやく、現在の地に伊奈波中学校が誕生したのです。しかし、校舎は兵舎を移築したものですから、光もあまり入らない暗い教室で、雨漏りもひどかったようです。校地は、河原の中になり、運動場とは名ばかりで河原の石がごろごろしており、ネコヤナギが生え、川の流れた跡が穴になつていて、砂利がある、すすきがあるというような状況でした。学校の東には昔の川の一部が池として残つており、ハエ、コイ、フナなどがいるようなりさまでした。

(三) 校名の制定

本校が岐阜市立第一中学校として発足した時、岐阜市発展の一番もとになつた昔の金華あるいは京町を校区に擁しており、校区の人々は岐阜市のナンバーワンの学校として第一中学校という校名に誇りを感じていました。しかし、第一中学校とか第二中学校という名ではどこにある学校かわかりにくく不便な点も多かつたので、市民が親しみをもてるような学校の名称を学校のある地域で選ぶこととなり、の中学校も一九四七（昭和二三）年九月より校名を変更する措置がとられました。第一中学校の校区で

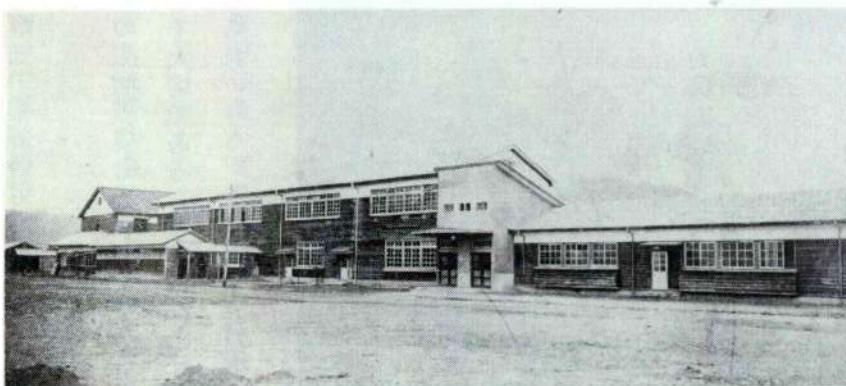
もいろいろな案が検討されました。しかし、前にも述べたように学校区がさらに変更されて、新たに則武や島の一部が編入されました。金華中学校という校名のままでは、島や則武の人々にはなじみにくいのでさらに検討が加えられました。伊奈波神社が、岐阜市の氏神様であることから、金華・京町や島・則武の人も異論はないだろうということで、一九四九年（昭和二十四年）二月一日より伊奈波中学校と校名を改め、今日に至っています。第一中学校創立から一年九ヶ月後、金華中学校と校名をかえてからわずか五ヶ月後のことでした。このように、校名は第一中学校から金華中学校へ、さらに伊奈波中学校へと変更しましたが、校区の人々の第一中学校にこめた思いはその後も搖らぐことなく、岐阜県でナンバーワンの学校にしなければならないという自負と決意が強く学校を後押しすることとなりました。

（四）全生徒がようやく一箇所で

一九四九年（昭和二十四年）四月には、分散して学習していた全生徒が初めて現在の地でひとつとなり、学級数二九学級（一年九学級、二年十学級、三年十学級）生徒数一五四七名の中学校としてスタートしました。金華小学校に間借りしていた中学生は、一人ひとり、机と椅子をもって徒步で忠節橋を渡りました。一学級あたり、五〇名を越すぎゅうぎゅう詰めの教室でしたが、新しい学校がとにかくスタートしたことを祝して、六月二十四日には、落成記念式典も行われました。

当時、金華や京町の人たちは伊奈波中学校へ通学するのに、長良橋を渡るか忠節橋を渡るしかありませんでした。当初は、みんな徒步通学でした。バスもなかつたし、今のような靴もなく草履や下駄で通学をしていました。長良橋や忠節橋を渡り、大きく迂回するため、通学するにもたいへんでした。

通う学校ができたといつても、決して十分な施設や環境ではありませんでした。その後も地域の方々の支援を受け、学校の充実に向けた取り組みが続けられました。中学生も、さまざまな不自由や不便に耐えながら、少しでも充実した学校生活が送れるよう工夫したり努力したりし、学習にスポーツに精一杯取り組みました。当時中学生であつた方々は、現在の七十代のおじいさん、おばあさんとなつておられます。身近におられる方々から、当時の苦労を聞いてみてください。



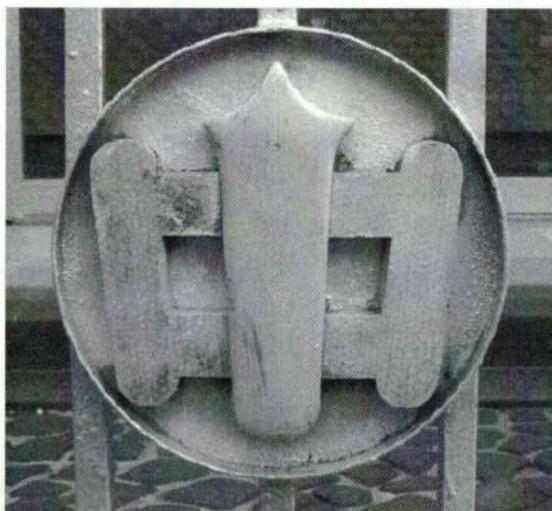
昭和24年当時の伊奈波中学校全景

二、伊奈波中学校の精神

(一) 「伊奈波中校章」の象徴するもの

戦後の混乱した社会の中で学習環境はもちろんのこと、一人ひとりの生活環境も思うようにならない時代でした。こうした中では、生徒一人ひとりの精神や心の持ち方こそ大切であると考えられました。開校当時の伊奈波中学校で大切にされた精神は、校章や校友歌にこめられ、今も、そのまま受け継がれています。

伊奈波中学校の校章は、初代校長 深浦泰平先生の時に定められました。先生は、敗戦後の社会の疲れ果て希望ももてない状況の中で、「戦争では負けたが、学力では外国の子どもに負けさせん。みんなが、平等で幸せになる日本を創る。」とまわりの先生方や生徒に話されていました。校章の制定にあたっても、平和的で文化的な国家の建設を強く意識され、生徒全員に校章の募集がされました。生徒のアイデアをもとに、先生方が中心になり、練りに練つて現在の校章が定められました。ペンを組み合わせた校章の意味する精神は、がつちり仲良くます。



北門跡に残る校章

わりを四角で囲み、真ん中に一本筋を通す。その筋は、ペン（＝文化）であるというものでした。

「経済、学問、芸術という文明で日本を立て直し、国際間に名譽ある地位を築く」という國の方針を受けて、「文」ということでいこうと考えられたのです。生徒達も、こうした先生方の教えを受け、「平和と文化」の理想の灯を高く掲げ、「ペンの輝き」をますます輝かせて前進しようと決意を固めたのです。

後に、当時を振り返り、二十年記念誌の中で深浦先生はこう述べておられます。「当時の私の考えでは、アメリカやイギリスやフランスの子どもに学力で負けさせはせん。けんかでは負けた。当分の間、けんかはしない。こちらでもできそうな金もうけや学問や芸術で勝負しよう。これが、憲法でいう平和国家、文化国家ということだから、他国の子どもに絶対に負けないようにやりましょう」ということで、これを生徒たちにも先生たちにも言いました。軍部の中に危険思想が生まれたのは、部下である兵隊の出てくる農村が貧乏すぎたからだ。戦争をなくし、特権階級の特権をなくして、みんな同じ状態において、文明国家にしよう。これは、歴史はじまつて以来のことと、みんながしあわせになる時代をつくるのはこれからやと、昭和の夜明けがくるという校友歌を作りました。」

敗戦という厳しい現実の中で、新しいあり方を強く求めていこうとする当時の強い信念を感じずにはおられません。

ところで、みなさんが日頃目にする校章は、その形だけですが、伊奈波中学校の校旗（口絵の写真）を

参照)で見ると、朱色の旗の中央に伊中の校章が刺繡され、その色は四角の部分が銀色であり、その四角を貫く真ん中のペンは金色になっています。高貴な色とされる朱色、金色、銀色を配し、しかも金色に光り輝くペン(金ペン)を中心におくデザインには、大いなる文化創造の意気込みを感じます。当時、金ペンはたいへん高価なものでした。あえて、そういうものを校章に選んだ人々の心意気を私たちも大切にしたいものです。

(二) 校友歌にこめられたもの

皆さんが、現在歌っている伊奈波中学校の校歌は、一九五八(昭和三三)年に制定されました。それ以前には校歌はありませんでした。しかし、学校が開設された当時、生徒全体の意識を高めるために、深浦先生によって校友歌が作られ、以後、機会あるごとに先生も生徒もその校友歌を歌い、その精神を互いに確かめ高め合つたのです。

伊奈波中学校 校友歌

一 清冽の流れ長良川

穢れに染まず 進みて止まん

平和日本の文化を高め

光輝ある歴史を我等つくらん

伊中のペンは輝く

我等天下の伊中健児

二 不屈のシンボル金華山

苦難に耐えてやすけき姿

郷土の産業 文化の栄

道険しくも 我等進まん

伊中のペンは輝く

我等天下の伊中健児

歌詞にある「平和日本の 文化を高め 光輝ある歴史を我等つくらん」、「郷土の産業 文化の栄え 道険しくも我等進まん」「伊中のペンは輝く」などのどこをとつても、まさに伊奈波中学校創立時の精神がそのままこめられています。この校友歌は、その後も長く歌い継がれ、新たに校歌が制定されるまでは校歌と同じように、機会あるごとに先生や生徒の間で歌われていました。校歌制定後も校友歌は歌い継がれ、皆さんのが生徒手帳には今も校歌の次に掲載されています。校友歌は、体育祭の時に応援合戦などでも歌わっていました。

校 友 歌

Allegro $\text{♩} = 120$

せいれつ のながれ ながらが わけが れにそーま
すすみてやまーず へいわにっぽんのぶん
かたーか 一めこうき あるれ きしをわれらつくら
ん 伊中のペニーはかがーやくわ
れーらー てんかの 伊中けんじ

校友歌の楽譜

(三) 激増する生徒数

一九四七（昭和二二）年、生徒数七〇三名でスタートした伊奈波中学校は、翌年に生徒数が倍増し一五〇〇名を越しました。完成したばかりの校舎ですが、とても足りません。さらに校舎の建築や増築に取り組まざるを得ない状況が続きました。そんな状況で、運動場を造ることまではとても手がまわらなかつたようです。一九四九（昭和二四）年八月に二代目校長の福手政雄先生が赴任され、その状況を見られて運動場がなかつたと述べておられます。あるのは、河原のほんのちょっとの部分が埋めてあって、そこで体操をやるような状況であつたというのです。福手先生は六年半在職されましたが、その在任中は教育をするための校舎を造るとか、運動場を造ることに走りまわり、一年ごとに新たな校舎ができ、運動場が少しづつ広くなっていくという状況だったと二十年記念誌の中で述べておられます。今日のように、短期間で校地や校舎を造ることは当時ではとてもできることではなく、たいへんな苦労があつたようです。教室など学習環境が十分ではなく不自由で不便なことが多かつたにもかかわらず、先生方や生徒自らの努力により、学校の授業やいろいろな活動も少しづつ充実し、生徒の文化活動も向上し、岐阜市内の百貨店などで「伊中作品展」なども開催されるようになつてきました。

一九五六（昭和三二）年には、二〇〇〇名余の生徒がこの伊奈波中学校で学びました。この時代は、全体として校舎の増築につぐ増築で、とにかくPTAや地域の方々といつしょになつて学校を造ることに取り組まれた時代でした。

【生徒の制服を定める】 学校創立当初、戦後の物不足の時代であり、制服などはもちろんなく、それぞれに家にあるものを着て登校し生活していました。戦後の復興が進み、人々の生活も落ち着き始めた頃、服装の問題について検討され、制服が定められました。生徒・保護者・先生の各代表が集まり、原案を作り、制服の製造元まで出かけて検討し、生徒の意見も取り入れて制服が定められました。男子生徒は学生服でしたが、女子生徒の制服は、スカートの白線一本、ブレザー式の上着など当時はセンスの良い制服として喜ばれたということです。その経緯の一部が、二十年記念誌の座談会で紹介されています。

【一九五六（昭和三二）年度～一九六七（昭和四二）年度】

一・凌雲の志と校歌

（二）「凌雲」の由来から

東側正門入口付近に、「凌雲」と刻まれている石碑があります。この石碑は、かつて北舎北側の道路に面した旧正門脇の庭園にありました。正門の位置が変わり、現在の場所に移されました。石碑にある「凌雲」は三代目校長 松田 充先生の直筆です。この言葉は、伊奈波中学校の校歌の中にも歌われていますし、現在の図書室にも額にして掲げられています。これは伊奈波中学校の精神として、脈々と現在まで受け継がれてきたものなのです。

松田先生が本校に赴任されたのは一九五六（昭和三二）年でした。開校当時に比べれば校舎など整備されてきましたが、まだ学校と呼べるような状況でなかつたと述べておられます。

「狭くて暗くじめじめした教室もあつた。夏は暑く、西日があたると黒い汗が油のようににじむ、ひとたび大雨でも降ろうものなら天井から雨が漏り、見る見るうちに床は水浸しになるようなりさまであつた。」

先生は、こんな環境の中でも静かに一生懸命に取り組む生徒の気持ちをふるい起こさせようと、この地を「凌雲台」と名づけられました。中国の「後漢書」に、次のような一節があります。“苟（かりそめ）の得（とく）を求めず、常に凌雲の志有り”と。「苟の得」とは、目先だけの利益という意味であり、「凌雲の志」とは、雲を凌ぐような高い理想・こころざしという意味です。伊奈波中学校で学ぶ生徒が、目先のことなどらわれず、高い志をもち、学習やスポーツに励んで欲しいといふ願いを込めて命名されたものです。以来、伊奈波中学校の校歌にも歌われ、本校に学ぶ生徒達は、「私は、この精神を引き継ぎ、凌雲の志をもち、自らの意志で行動し、新たな日本社会を創造する力をつけてはならない。」と決意を新たにすると共に、先生方もそうした人材の育成を図る教育に努めなく



昔の正面玄関（北舎北側正門）脇にあった凌雲の碑



東側正門にある凌雲の碑

てはならないと強く決意されたのでした。

二十年記念誌に、赴任された当時の松田先生の感じられたことが「砂漠の中の学園」として述べられています。「春が来ても、学園には芽が吹かなかつた。緑の木がなかつたからです。たつた一本、広い校庭に桜がさみしく立つていた。花を散らす風が吹くと、砂漠の嵐（運動場の砂塵が舞いあがり、砂が風と共に吹きつける）だ。私は、花のない学校というものを想像したことがなかつた。人の心も冷たくうるおいがなく、いじわるがいっぱいいつまつているようにさえ感じた。こんなのは好きになれそうもない。第一、知性に感情がついてこない。不自由が当たり前のように教えられてきた学園。私は冷え冷えとした心を暖める緑の学園をつくろうと思いとりかかつた。」とあります。まず学習できる校舎を、まず体力を鍛えられる運動場を、という時代から花や木にあふれた学校づくりをめざそうという時代にさしかかっていたのです。

(二) 校歌の制定

現在、みなさんが歌っている伊奈波中学校の校歌は、一九五八（昭和三三）年につくられました。それまでは、前にもふれたように校友歌が現在の校歌のように歌われていました。新しい校歌の作詞者は、詩人で童謡「小ぎつね」などの作詞で有名な勝承夫（かつ よしお）氏でした。伊奈波中学校の校歌も含め、日本各地の学校の校歌を作詞されています。また、作曲は童謡「たなばたさま」などを作曲し



校歌発表会

た埼玉県出身の作曲家で、下総院一（しもふさ かんいち）氏でした。氏もまた各地の多くの学校の校歌を作曲されています。両氏とも、当時の著名な作詞家、作曲家でした。校歌がつくられるようになつた経緯は、詳しくわかりません。しかし、一九五八（昭和三三）年十一月十四日に、現在の市民会館の位置にあつた岐阜市公会堂で校歌の発表会が行われた写真が残されています。おそらく、開校十年目を記念してつくられたものと思われます。当時は、金華山や長良川と伊奈波中学校の間には、大きな建物はなく、岐阜市のシンボルである金華山の峰から裾までその全容をそのままながらることができ、その不動の姿は大きな心のささえになつていたことでしょう。校歌に「ここに泉あり」、「ここに誓いあり」、「ここに星座あり」と謳われたよう

うに、これまでの伊奈波中学校十年の苦難の歩みをもとにした新たな思いを込めたものでした。

この校歌制定を期に、伊奈波中学校は新たな一步を刻んだのでした。それ以来約五十年、それぞれの時代の思いをこめながら、代々の中学生や先生方によつて校歌は歌い継がれているのです。

伊奈波中学校 校歌

一、仰げば晴れて 大空に

金華の山は かがやく緑

ここに泉あり 伊奈波中学

若き力の 沸きたつところ

希望はてなき われらが母校

二、若鮎おどる 水清く

長良の夢は 世界に通う

ここに誓あり 自律の気風

あすの平和の 文化を築く

意気と純情みなぎる われらが母校

三、花咲きみのる 凌雲台

小鳥も歌う 若木の梢

ここに星座あり 伊奈波中学

つねに 変わらぬ 友情燃えて

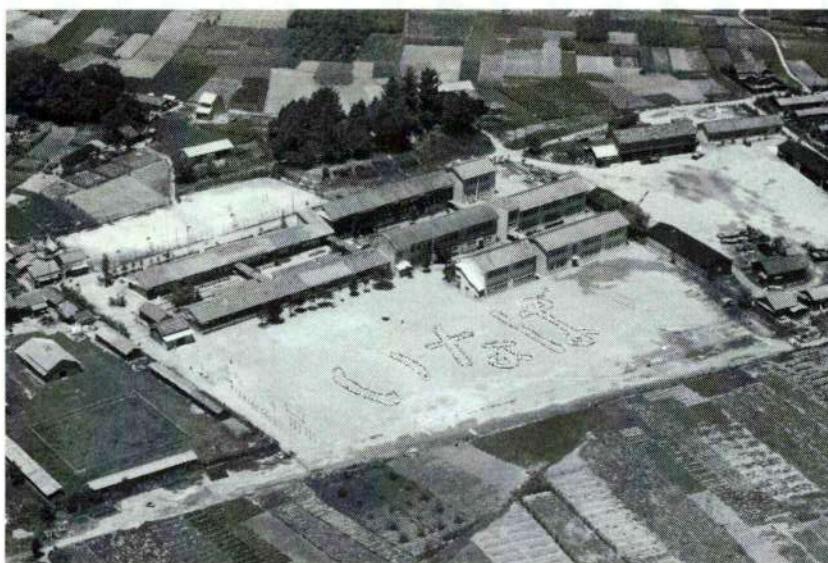
永遠に栄ある われらが母校

二、生徒数の増加と学校施設

(一) 旧体育館の建設と校舎の増築

下の写真は、一九五九（昭和三十四）年当時の伊奈波中学校の全体写真です。伊奈波中学校の道路北にもグランドがありました。校舎とグランド以外の施設はありません。

一九六〇（昭和三五）年五月に、旧体育館が完成しました。この体育館は、ちょうど今の運動場の東フェンスに沿った部室前から西側あたりの場所に建設されました。この体育館の建設にあたっては、地域やPTAの方々の並々ならぬ努力がありました。市が体育館を作ってくれるのを待つていては、今の子どもたちの体力をつけるのに間に合わない。何とか自分たちの力でとPTA総会で決議され、寄付も募り、市にもお願いしてつくられたものだつたのです。雨が降れば、体育の授業はできませんでしたが、



昭和34年の校地校舎の全景写真

体育館ができてからは天候に左右されることなく体育の授業ができるようになるとともに、講堂として行事や生徒の集会などにも使われました。この体育館は、その役割を終えて、一九八六（昭和六一）年に解体され、現在では見ることはできません。

一九六一（昭和三六）年には、現在の北舎鉄筋校舎の一部が建築され、増加する生徒のために、次々と校舎や学校施設が新築・増築されました。最も生徒数が多くなったのは、一九六二（昭和三七）年のことです。在校生二四〇〇名だったと記録されています。現在、伊奈波中学校北側の道路北に岐阜市水道部の建物がありますが、ここは当時、北運動場として使っていました。しかし、ここにも校舎を建築し、道路を挟んで教室を造りました。校舎と校舎の間の道路は、砂利道で現在のように舗装されていませんでした。晴れた日には車の巻き上げる砂ほこりが、雨の日には通行する車がはねる泥水が飛ぶといった状況でした。雨の降った日などは、教室の移動もたいへんだったと思われます。しかし、生徒数の急増期としてはやむを得ないことでした。

校舎建築に加え、緑の環境をつくろうと、現在の北舎北側の道路に面した正門付近に庭園がつくられ

ました。また当時、中舎（木造二階建）と南舎（木造二階建）の中庭に、三～四教室分にもあたる大きなひょうたんの形をした池もつくりられ、大きな鯉をはじめ種々の魚が泳いでいました。池のまわりには樹木も植えられ庭園もつくりされました。こうして、着々と緑の環境も整えられました。

このひょうたん池は、その後の校舎改築に伴って埋め立てられ、今では写真でしか当時のようすをしのぶことができません。休み時間には常に生徒の憩いの場となり、当時の卒業アルバム写真には必ず登場する場所でした。



ひょうたん池（中舎と南舎の中庭）

（二）給食室の竣工と校舎火災

一九六三（昭和三八）年一月十日には、給食室が完成し、竣工式が行われました。当時の給食室は、現在の校地の北東部角の道路に沿って南北に建てられました。二千名の給食が始まつたのです。

しかし、給食室が完成して半月もたたない一月二二日に、原因不明の火災により、近くの木造校舎六教室分が焼失してしまいました。当時の松田校長先生は、「北舎二階建の六教室は憎むべき放火犯に

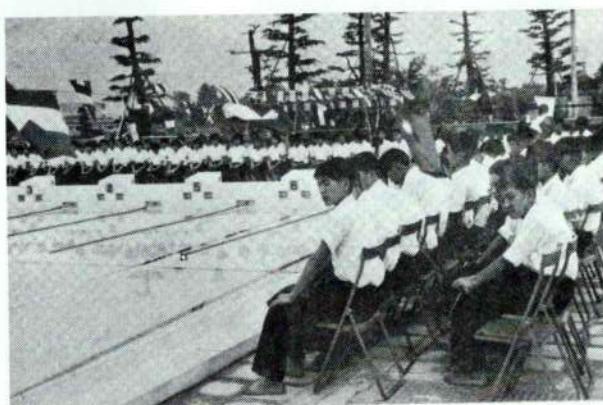


完成した旧体育館

よつて焼失してしまった。たとえ、老朽校舎であろうと天寿を全うしなかつたのは残念だ。」と述べておられます。生徒数が急増する時期でもあり、市も即座に校舎建築にかかり、二ヶ月後の三月には、鉄筋校舎が増築されました。

(三) プールの完成

一九六七（昭和四二）年七月一三日に、七コース二十五メートルのプールが完成しました。このプールは、現在もみなさんが利用しているものです。このプールの完成により、伊奈波中学校は創立以来二十年を迎え、ようやく学校としての施設がほぼ完成し、学校環境も整えられてきたのです。この年の十一月二十日には、華やかに、二十周年記念式典が行われました。



プールの竣工式

三、金華橋の建設

(二) 金華橋の開通

一九六四（昭和三九）年十月二六日 現在、長良川にかかる金華橋が開通しました。この橋は、すでに一九四九（昭和二十四）年に岐阜市議会でも要望の決議がされていました。伊奈波中学校がこの地に建築された頃は、あたり一面の河原でしたが、早田地区は住宅地区・学園地区として、わずかの間に大きく発展してきました。早田地区と岐阜市街地とを結ぶ橋が岐阜市の発展のために必要となつたわけです。橋の建設に向けた調査や準備が進められ、一九六一（昭和三六）年一月に工事が始まりました。一九六五（昭和四十）年の岐阜国体に間に合わせるために、予定より早く工事を完了させようと、突貫工事により一年ほど早く完成しました。総工費四億六千万円をかけ、二年十ヶ月の短期間でつくりあげられたのです。

(二) 通学距離が半分に

この金華橋は、地域の発展のために建設されたのですが、伊奈波中学校にとつても、極めて大きな意味がありました。というのは、当時の伊奈波中学校の生徒は千八百名もいるマンモス校でした。しかし、その七割以上が、長良川以南の金華・京町から通学する生徒でした。毎日毎日、学習用具を詰めた鞆をかかえて、長良橋か忠節橋を渡つて通学していたのです。長良川より南から通学する生徒にとつては、

橋を渡つて学校へ通うため、たいへんな遠まわりでした。自転車通学も認められていきましたが、自転車置場にも限りがあり、みんなが自転車を使うことはできませんでした。

あまりの道のりを徒步で通学するため、夏の暑い日など学校に着くと、疲れてぐつたりしてしまうというようなこともあります。冬の寒い日などは、手がこごえてしまうこともあります。こうした問題を何とかしようと、PTAや地域で相談され、上げ門渡船（現在の四屋公園北の堤防下から早田の津島神社南の堤防下にあつた長良川の渡し船）を復活させ、通学の便を図りましたが、とても大勢の中学生を通学時間帯の一時に渡せるものではありませんし、渡船を利用すれば当然お金も必要でした。もちろん、大水の時には運航されません。結局、歩いて通学する生徒が大部分で、金華橋完成までは、多くの生徒が遠まわりをして通学せざるを得なかつたのです。

しかし、この金華橋の完成により、ほぼ一直線に自宅から通学できるようになり、通学距離は半分と

なり、学校がとても近くなりました。完工式の行われた十月二六日に、全校放送で「明日から金華橋を通つて登校してよろしい。」という放送が流れた時には、各教室から歓声があがつたといいます。生徒会では、橋をかけていたいた市にお礼を言おうと、当時の松尾市長さんに生徒会の代表が花束とお礼の作文をもつて校長先生と共に市役所を訪れました。「この喜びはとても表現できません。登下校で短縮される時間を有効に使つて、橋を造つていただいたみなさんに報いたいと思います。」と代表者は述べています。

市長さんもたいへん喜ばれ、「金華橋は、岐阜市の重要な幹線としてこれからますます交通量も増えるので、交通事故に遭わないよう通学してください。」と言葉をかけていたいたと当時の新聞は報道しています。

また、金華橋の開通にともない、北側の正門とは別に、校地南側の早田公園わきの早田川に橋をかけ、南側から生徒が登校できるように新たに通用門が作られました。わざわざ、北側の正門まで行かなくて済むというので、生徒はとても喜んだといいます。その後、校舎の再配置により、現在の東正門が作られ、この門は特別な時以外は利用していませんが、当時は、長良川を渡つて登下校する多くの生徒の通用門として利用されていました。



早田川に橋をかけ、新設された南門



生徒会代表が松尾市長にお礼（新聞報道）

金華橋をありがとう

伊奈波中 生徒会登下校の距離も約半分に短縮

伊奈波中 生徒会松尾市長に花束贈る



金華橋をあつていただきありがとうございます……伊奈波中生
徒会代表の先野さんから花束を受ける松尾市長

生徒会代表が松尾市長にお礼（新聞報道）



金華橋をあつていただきありがとうございます……伊奈波中生
徒会代表の先野さんから花束を受ける松尾市長

生徒会代表が松尾市長にお礼（新聞報道）